地名の使用とその機能に関する文化・社会地理学研究（要約）

北西　諒介

本論文は，地名研究あるいは地名学における理論の不足を補うという観点から，地名の使用とその機能に関わるいくつかの課題に着手し，地名に関する理論的体系の確立を見通しつつ，その一端を担うことを目指したものである。

第 1 章では，既往の地名研究の整理を行い，その蓄積には大きく二つの点で不足があることを指摘した。まず，日本における従来的な地名研究に対しては，総じて語源の探求に関心が集中し，生成以後の使用に対する着眼は比較的薄いこと，その中でも特に実証的研究が不足していることを指摘した。一方，近年英語圏を中心に展開される批判地名学という研究潮流に対しては，地名に対する批判的アプローチを確立したという研究史上の意義は認められつつも，方法論としての地名の活用に留まる傾向にあり，地名を切り口とした議論への志向が不足していることを指摘した。こうした問題を踏まえ，地名の機能とその前提としての意味という図式を用いて，その複数性や相対性について指摘し，地名を起点とした研究の方向性を模索した。その上で，なぜそこがその地名で呼ばれる（または呼ばれない）のか，という根本的かつ普遍的な問いを出発点として，その説明に不可欠な意味と機能を具体的な使用の場面から明らかにするという研究目的を設定した。

第 2 章では，ニュータウンを対象に，開発地域，ひいては近現代における地名の命名の特徴を明らかにし，命名された地名の継承あるいは断絶を捉えることで，地名が景観や地域社会とどのように関わり合ってきたのかについて検証した。大阪府の千里ニュータウンでは，ニュータウンという新しい町に対する開発主体や住民らの意識と，開発による景観の一新という事情を背景として，多くの新しい地名が命名された。その過程では，数字や樹木，抽象名詞などが選好され，共通した命名原理があることが見出された。さらに，そうした背景には景観を一新したことによる地名を名づける際の参照物の乏しさが指摘された。また，ときには命名による空間の分節化が先行し，後から景観が形成されたことも指摘された。こうして生み出された地名は，使用されることを通じて場所の形成に関わり，それがまた地名の解釈や使用に対し影響を及ぼすという相互作用も確認された。本章最後の補節では，命名原理の類型化を行い，千里ニュータウンと多摩ニュータウンとの間での比較検討を行った。その結果，開発プロセスなどに大きな違いを持ちつつも，両者の命名傾向にはいくつかの共通項が見出され，開発地域や近現代という時代の下における命名の一般的傾向と言えるべきものが示唆された。

第 3 章では，多様な主体による多様な意味づけの重なり合う結節点としての地名の働きに着目し，千里ニュータウンで地域活動に関わる行政・住民らにとっての地名「千里」の意味と，地域活動の展開状況との関わりを聞取り調査の結果から分析した。「千里」は空間的には千里ニュータウンという建造環境よりも広く捉えることが可能であり，それゆえに空

間的に曖昧な存在と解釈されている。そして，その曖昧さゆえに，地域活動においては，単にその活動領域を表すという位置表示の機能だけでなく，限界はあるものの，その地域に関心のある者を広く包含してまとめ上げるという点で，結束の機能を果たしていることが指摘された。この結束の機能については，一つの地名に束ねられた意味の組み合わせや曖昧さの度合いが異なることから，それぞれの地名に固有で相互に代替不可能なものとして捉えられていることも指摘された。

第 4 章では，行政地名の中でもより身近な環境に関する知識を構成すると考えられる町名に着目し，住居表示と旧町名復活を経験した富山県高岡市を事例として，町名の位置づけとその変遷を明らかにした。具体的には，昭和の住居表示では実施がどのように推し進められたのか，その後の旧町名復活の検討過程においては，町名がどのように捉えられていたのかに着目し，新聞や行政資料の分析や聞取りによって考察した。高岡では住居表示の実施以降，「町名」と呼ばれるものが，住居表示町名と旧町名という 2 通りに分かれ，二元的な町名のあり方が維持されてきた。住民らは前者を行政や郵便のためのもの，後者を日常のコミュニケーションにおける語彙の一環として，あるいは地縁組織の活動のための枠組みとして使い分けながら，そうした現状が習慣として受け入れられてきた。その上で，このような背景が後の旧町名復活の機運が盛り上がりにくいという状況に繋がっていることを指摘し，その意義に関しても，復活それ自体に対する心理的な充足よりもむしろ，コミュニティの結束力向上や補助金といった面が意識されることになったことを明らかにした。また，この旧町名復活をめぐっては，住居表示を経験した町とそうでない町の住民との間で町名の位置づけに差異があることが確認された。

終章では，本論文で得られた知見が地名研究あるいは地名学に対して，以下のような意義を持つと考えられることを示した。第 1 に，地名がいかに使われているかという地名の性質に関わる地名学の根本的な課題に対し，一定の貢献を果たしたことである。本研究で扱った事例はいずれも先行研究が明示してこなかった，新しい地名の機能を示唆するものであった。特に，第 3 章と第 4 章の事例では，住民らの日常生活と関わるレベルで地名の意味づけを問うた。政治的な対立や権力の構造が顕著な地域に注力しがちであった批判地名学に対し，より普遍的な知見を提供することができたと考えられる。第 2 に，分析手法としての地名の活用に留まらず，地名という切り口から分析を行うという，批判地名学の研究視角の発展を試みたことである。指標として利用することで地名の意味の解釈が固定化されてしまうことを避け，地名が多様な意味づけの対象であることを認めながら，その上で機能としての一般化を図ることで，地名それ自体がより深く分析される可能性を拓いた。特に第 3 章では多様であるがゆえに曖昧になり，効果を発揮する例を指摘した。

また，本論文で扱った事例ではいずれも行政に関わる動向に触れることになった。行政は近代以前からの地名を追認し，時には改変を加えることで，人々の生活のあらゆる局面における地名の使用に対し直接的・間接的に関わってきた。地名の探求に際してこのような制度的な背景との関わりは無視できないものである。地名に関わる行政の営みは重要であり，そ

の力による変容と影響力を明らかにすることは，今後，地名標準化を推し進めようとする上でも必要とされる課題であろう。その意味でも，本研究の行った地域の地名に対する個性豊かな意味づけの解明と，その機能における一般性を問うという姿勢は，本研究の事例地域以外でも実践されるべきと思われる。

本論文の残された課題としては大きく 2 点が指摘される。1 点目は，学際分野として位置づけられる地名研究の特徴を充分に生かしきれなかった点である。第 1 章では言語学や民俗学といった地理学以外の分野の研究も参照したが，第 2 章以降の事例の考察や方法論の部分にうまく取り込むことができていない。特に言語学は固有名詞を研究する命名学（名称学）との結びつきが深く，そうした分野の知見も組み合わせることで，考察がより豊かで説得的なものにできたと思われる。2 点目は，地名とは直接関わらないより広範な研究成果の蓄積に照らして，地名の役割を相対化することである。地理学を中心に，様々な表象や実践などによって場所の構築やそのプロセスが分析されてきたが，そうしたものと地名がいかに異なるのか，あるいは，どう関わるのかを明らかにすることができれば，地理学をはじめとした人文社会科学で地名を研究する意義をよりいっそう高めることができると思われる。